あのころのこと

藤木宏幸

児童文学研究家の上笙一郎さんの寒中見舞に、「『東北少国民』昭和二十一年九月号に、大兄が鳴子の国民学校にあてた手紙を発見しました。お目にかけましょうか？」という添え書きがあって、ちょっとびっくりした。たしかに私は学童疎開の世代で、国民学校（今の小学校）四～五年のころ、小石川（東京・文京区）の礫川国民学校から、宮城県鳴子町に集団疎開をした体験があったが、敗戦後になって鳴子へ手紙を出した記憶などまったくなく、なにを書いたのだろう、という気持と〈あのころのこと〉がふっと頭をよぎって、奇妙な気分になって、できたら読んでみたいので、コピーでも送ってもらえないでしょうか、と上さんに返事を書いた。

上笙一郎さん（その昔、旗の台時代の文芸科に講師としていらしてたと、あとで助手のひとからきいた）とは長い間のおつきあいで、いろいろのことを教えられた。いま駒場にある日本近代文学館の草創期に一緒に働いてきた仲間であり、その図書資料委員会のメンバーとして二十五年以上も前には、週に何度も顔をあわせ、古書展めぐりやら、資料収集に奔走してきた仲でもあった。近年は文学館の委員会で年一、二回会ったり、時に劇場で偶然あうこと以外ほとんど会えなくなってしまったが、その書かれたもので多くの学恩を受けてきた。昨年暮にいただいた上さんの論文集『与謝野晶子の児童文学』（関西児童文化史研究会発行、八八年一〇月刊）は、丹念な資料の摶捜によって、ほとんど忘れ去られていた近代児童文学史・文化史上の晶子の業績に照明あてた貴重な仕事であったし、本書によって、私は長年探索していた晶子の小文の初出誌を知ることができた。上さんが長い年月をかけ、資料を広く渉猟して研究をすすめられているのは、やはり昨年七月、出版ニュース社から出された『児童文化書々游々』という一書に明らかであり、その最初におかれている「コショテン大学のこと」が上さんの研究方法を明確に物語っていてくれる。

さて、まもなく上さんから、コピーではなく、実物の『東北少国民』が送られてきた。敗戦一年後の雑誌だから、もとより紙質のよくない四八ページばかりの、こども向けの月

刊誌なのだか、仙台の河北新報社の刊行で、表紙は初山滋画の三色刷り、色刷りページもあり、案外立派なものであった。内容も新憲法下の「国会の話」、「名作物語」「名画解説」「科学人伝」などの他童話や漫画も入っている。真面目な編集で、アメリカ関係のものがみられるのは占領下であったせいであろう。八ページから一四ページの下段に「おたより」の欄があり、疎開したこどもたちから地元のこどもたちへの疎開中のお礼の手紙が載せられていた。そのなかに、「鳴子の皆様へ」という「磐川国民学校　初六」の私の六百字余りの小文が、たしかにあったのである。

前後の文章から察すると、これは河北新報社の企画ででもあったのだろうか。はじめに鳴子国民学校からの手紙が届いて、それに対する返事のようである。初六――つまり国民学校初等科の最高学年六年生のなかから、ふたりが選ばれて、返事を書いたものらしい。学校（といっても、小石川伝通院の脇にあった磐川国民学校は、一九四五年（昭和二〇）三月の東京大空襲で焼失し、戦後は御殿町か柳町の国民学校に同居していたのだが）の校庭が開墾されて「食糧増産のため」畠ができ、「僕達の組は畠に、甘藷の苗を植ゑました。――麦も相当大きくなりました」などと書いている。最後に「ではおたがひに、食糧危機を突破し、又再建日本のために頑張りませう。さやうなら。」（当然、まだ旧仮名遣いである）と書いて、東京の学校の様子を報せているのをみると、当時の食糧事情の悪化した状態が手にとるように明らかで、そのため学校は午前中で終っていたらしい。

集団疎開中のお礼の手紙で、「スキー遊びやわらび取りや、又皆様といつしよにした、運動会などがなつかしく思ひ出されます」と書いて、みんな集まって鳴子のことを話しあうと、「鳴子のよい事ばかりが思ひ出になつて、皆の話題になります。一年三ヶ月間の鳴子の思ひ出は、僕達の一生のうちに、忘れる事が出来ません」とも書いている。

いま四十余年ぶりに、あのころ書いた手紙を読み返してみると、どうもこれは私の本音ではなさそうである。戦時中の空襲の激化に伴って、大都市の学童集団疎開が決ったのが一九四四年（昭和一九）六月末のことで、実施に移されたのが同年八月。私たちは八月中旬に宮城県の山の中の温泉街鳴子町に疎開していった。温泉旅館にいくつかの学校が分散して宿泊した。私たちの場合は、鳴子の国民学校へ通うのではなく、旅館の一室が教場となった。しかし、ほとんど勉強をしていた記憶はなく、わらびとり（これは冬場の備蓄食糧）、薪運び、牧場へ畠の開墾などにかり出されていって、幼い身体に過重な肉体労働を課せられていた。疎開当初まるまると太っていた子供が、帰京直前にはやせ細ってしまったのを、当時撮った写真で実証することもできる。私も敗戦直後に栄養失調半分、神経症半分で、東京の親許へ送り返される寸前であった。なによりも耐えがたかったのは、旧軍隊の内務班のような班生活と、きびしいスパルタ教育で、鳴子の疎開生活には、手紙で書いたようなたのしい想い出ばかりではなかったのである。

土地のこどもたちからいじめられたという記憶もないし、別の旅館の浴場でこどもが性病を感染させられた、というような話も、戦後だいぶ経って聞かされたことだった。戦後、数年してから、学童疎開をしていた人たちが、お礼に出かけたことがあったが、私には素直に一緒について行けない気持が残っていた。上さんの厚意で、あのころのことが、ふと蘇ってきたのだった。　・・・・いま思えば、私の幼い戦争体験のひとつであった。